

第二卷 紹介 圖 書

第三號 一五二 (五二三)

正確なる事實に基き公平なる見地に在りて、變亂の勃發より終結に至る迄を叙せるを以て、事變の真相を知らんには拳禍記等と共に必讀の史料なり。殊に賊徒の横暴と清廷の狼狽とは巧みに記述せられて之を目暗するが如し。

●中國境界變遷大勢考附圖共二冊

蘇演存編

本書は錢恂の中俄界約糾紛注、鄒沅沅の中俄界記、前清總理衙門の中俄約章會要正續編、陸元鼎の各國立約始末記、吳大澂の吉林勦界記、何秋濤の朔方備乘、日本の間島問題、申報輯片馬交涉始末記等に據りて近世に於ける支那と諸外國との境界問題を解説せるものにして、第一編に概論及び現在の交界地域表を掲げ、第二編には遼東山川形勢を論じ、第三編より第十編までに於て日露英佛葡諸國との交渉顛末を説き、次に尼布楚條約以下間島協約に至る内外約章凡三十件を列記せり。往々誤謬なきに非ざれども、簡約にして要を得、附するに地圖二十二葉を以てしたれば、甚だ輕便なり。(價一、二〇)

●新譯英國政府刊布中國革命藍皮書第一編 陳國權譯

英國政府所刊 Blue Books は専ら外交に關する各種の文牘を載せ、西曆一六八一年に起り、一八三六年に至りて始めて發賣せり。本書は支那の第一革命に關し、在支英公使及び領事海軍將校等より隨時本國政府に通告せる所に基き、一九一二年(支那民國元年)

五月同政府より上下兩院に頒發せる藍書を漢譯せるものなり。内容は一九一一年十月十日駐支英公使發漢口革黨拘拿の電報より、同年十二月三十一日同公使發支那國會組織の通電に至る迄九百四十三種。内に本國外務大臣の反問、駐日英公使の日兵出動の通告などあり。此中には間々支那及び我國にて一般に知られし事實と符合せざるものあれども、以て英人の革命觀の一端を覗ふべく、原文の傳來少きため、本書また存在の價值あるものなり(價一、五〇)〔以上有高〕

●Louis Batiffol: the Century of the Renaissance.

(translated by E. F. Buckley) London, 1916

本書は Furek-Brentano 氏の主宰する the National History of France. (L'histoire de France racontée à tons) 中の一卷「文運復興時代」を記述せるものなり。該佛國史はかの Lavisse 氏の Histoire de France depuis les origines jusqu'à la Revolution と編纂の體裁相似て每卷各専門の史家が得意の時代を擔當して執筆せるものなるが、只後者に比して規模小く、稍一般向通俗的なるを免れざるが如し。然れども其記述平明にして興趣に富み、且つ學術的價值も高きを以て、佛國史學習者に對しては恰好の參考書と稱すべく、忠實なる英譯の世に出づるは一般讀書界の爲に更便に益大なりと云ふべし。Batiffol 氏の「文運復興時代」は該佛國

史六卷中第一に記述公刊せられしものにして、譯者 Buckley 氏は極めて忠實平易に原著の面影を寫し居れり。本書筆を Charles VIII, Louis XII 時代の伊太利侵入に起り Francis I 對 Charles V の抗爭 Francis I 時代の宮廷文明 Henry II 時代の對外關係より宗教戰爭時代の新舊兩派對抗の紛亂を説きて Henry IV に及び最後に Valois 家末期の佛文化及十七世初頭の國勢國情を叙して篇を了れり。佛に於ける Renaissance 時代即ち十六世紀の佛國を觀察し其對外關係、國家統治、政治界宗教界に亘れる紛爭、文化の狀態を知るが爲には、本書の如き最も便益に於て且つ興味深き好著と稱すべからん。

● **Sir Adolphus William Ward:** Germany 1815-1890 Vol. I 1815-1852. (Cambridge Historical Series) Cambridge University Press, 1916.

本書は一八一五年のナポレオン戰役終結より一八九〇年のビスマルク退隱迄の獨逸史を記述せるものにして、この第一卷に於ては筆を一八五二年の Olmitz 會合に擱けり。著者の依據せる史料參考書は卷尾の Bibliography によりて可成豊富なるものを知り得るが、その論叙の基礎となれる主要なる Authority は Treitschke 及 Sybel 兩大家の著者なることは著者の自序によりて明かなり。全篇七章より成り、第一章序論第二章、一八一五年の獨逸の

諸邦、第三章反動の十年、第四章對外關係及關稅同盟の初期、第五章兩度革命の中間期、第六章一八四八—九九年の革命、第七章エルフルト及オルミュツクの各章に亘り、自由統一の氣運動き來つて、而も未だ時機成熟せざる獨逸諸邦の動搖混亂の狀態を説きしものにして、略トライチュク氏の十九世紀獨逸史と相前後せる時代を取扱ひ居れり。該時期に於ける獨逸諸邦の國情輿輿の政策、對外問題、自由統一運動の概要を知るが爲には頗る有益なる著述なるべし。

● **John Spencer Bassett:** The Middle Group of American Historians. New York, 1917

本書は亞米利加史學界に於ける "Middle period" 即ち略十九世紀の初期より一八八四年米史學協會設立に至る時代の代表的史家を評傳せるものなり。著者は先づ卷頭に英植民時代以降の米史家及史界の一般狀態を説き、それより "Middle period" に於ける史界の大家 Jared Sparks, George Bancroft, William Hickling Prescott, John Lothrop Motley, Peter Force 諸氏の生涯著述性行を論述し、最後に當代に於ける史家とその出版者との關係を一瞥して卷を了れり。著者が、當代に於ける知名の史家は、科學的研究の精緻を極むるに至りし新時代の史學者に比して其社會的聲名高く、一般の讀史趣味も盛なりとは注意すべく、現代の如く歴史教

第二卷 紹介 圖 書

第三號 一五四 (五二五)

育整備と専門史家續出せるに拘らず、讀史の風史家の聲望昔日に及ばざるは識者の一考を煩はすべきものなりとせるは蓋し本書一篇の主旨なるが如し。されば是等諸大家の評傳に於ても、此點に對する觀察重きを占め、最後の章「歴史家とその出版者の如き、全くこの見地より附加せられしものなり。是故に本書は嚴正なる意味に於ける史學史としては不十分なるを免れざれども、かゝる着眼點より觀察するものには興味深き著述といふべく、兎に角この時期に於ける米國史學界に關する知識を求むる人士には尠からざる便益を與ふる著書なるべし。

● Arthur Bullard: the Diplomacy of the

Great War. New York, 1916

著者の序言に據れば本書は歐洲現代の外交史を考察するもの、爲に「Text-book たるしむる目的を以て著されしものなり。第一篇には一八七八年伯林會議以後に於ける歐洲國際關係の發展を叙し第二篇には該期の外交に現れたる New ideas, new elements として the Rights of Nations, Dollar Diplomacy, the Colonial world, the Growth of Public Opinion. (國民主義、産業政策、殖民政策與論の興起を指す) を説き、第三篇には現戰役の終結に伴ふ諸問題の解決を豫想として、軍事、外交上の推測より協、商、側、の要求、戰利の分配問題、土耳其の運命に及び、更に獨逸戰勝の場合を論じ、戰

後の國際外交、民主的勢力を説き最後の第四篇には合衆國と歐洲列國との關係を叙し、米の「Traditional foreign policy」戰役に對する米の態度、國防問題、米國と平和問題を述べ、卷尾に簡便なる Bibliography を附せり。兎に角一般向にして elementary なるを目的とせる本書は現代外交の大勢を知らしむべき好箇の手引たるべし。〔以上植村〕

● 中支那及南支那

東京地學協會著

東京地學協會の支那調查事業は明治四十三年より始まり、其第一回の調查報告として大正二年楊子江流域を出したるが、本書は其後に次ぐもの主として理學士野田勢次郎氏の踏査研究の結果なり、章を分ちて位置及區劃、地形、氣候、住民、人口及都邑、交通、産業とし完備したる一の地方誌なれども、就中著者の主力を注ぎたるは地質地形等の自然的方面にして、本地域を南北の地帶構造線によりて、印度支那山系、西部高原地帶、中央地溝帶、東部地壘帶、沿海山地帶に分ち、殊に其最後の部分即ち南嶺の大部分の地質構造に於ては從來の疑問に對して一の解決を與へたり。次に水系に就きては、各河流を源流、上流、中流、下流に分ちて、其流路の地質、地形との關係を明かにするに力め、本支流を合せる流域圖を添付せる等、邦文の地理書としては斬新なる試みと謂ふべし、尙住民、交通、産業の部は著者の實査に基けるものゝみに